

「実践事例集Vol.15」(2018年4月発行)で
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

平成29年度

ソニー幼児教育支援プログラム

主題 科学する心を育てる

夢中になって遊びを続ける子どもの姿を求めて

—発見した！考えた！わかった！楽しい！の思いをもって遊べる保育—



5歳児

豆の葉っぱはぬるぬるしてる・・・
桜の葉っぱとは違う・・・不思議・・・



4歳児

私のアリの赤ちゃんが生まれたよ・・・
卵を運んでいるよ・・・



3歳児

山の上にも上ってもくっつかない・・・
もっと山を高くしよう・・・

学校法人水谷学園 認定こども園

北陵幼稚園・北陵保育園

主 題 科学する心を育てる

夢中になって遊びを続ける子どもの姿を求めて

—発見した！考えた！ わかった！楽しい！の思いをもって遊べる保育—

1. はじめに

この数年子どもを取り巻く環境が急激に変化を遂げていることを実感している。遊びに没頭することができない子どもや、朝から脱力感いっぱいの様子を見せる子どもが多くなっている。その背景には家庭の教育力の低下が考えられるが、子どものそのような状況を、家庭の責任として一方的に押し付けてしまうことで解決することではないと思っている。私たちは常に、『子どもを主役に置いて』子どもの発達を理解し日々の保育で解決していかねばならないと思う。そのために、こども園で思う存分、自分の思いのまま遊びに夢中になって楽しめる子どもを育てることが求められていると感じている。本園では継続し「科学する心を育てる」実践を行い、研究を深めている。「科学する心育て」の主旨である主体的に遊ぶ楽しさ、学ぶ楽しさを味わう体験を通して創造性の芽生えが育まれる保育の姿を本園では「夢中になって遊びを続ける子どもの姿を求めて —発見した！わかった！楽しい！の思いをもって遊べる保育—」と捉えた。

2. 家庭の実態、子どもの実態

①家庭の実態

核家族化の状況、母親の働き方によって、子どもを育てるという環境が大きく変化している。子育てと仕事の両立の難しさが近年特に顕著に表れていると思う。母親として子どもをどのように育てたいか考える余裕が見えないように感じている。母親の子育てを楽しむ意欲、子どもと向き合う時間の確保、子どもの笑顔を生み出すかわり等について子育て中の母親の内面に添う努力も必要になってきている。子どもの心が安定し、遊びに没頭し、安心して遊び込むことができるための努力が必要であると考えます。

②子どもの実態

興味関心や意欲の乏しさが見られる。周りの様々な出来事をそれぞれの子どもが自らの心で受け止め遊びにつなげるための力不足が目立つようになってきている。指示があれば行動に移すことができるが、自らの力や、想像力で物事に向き合う姿に乏しさが見える。バーチャルの世界の遊びには、すかさず反応を示すが、身近にある様々な物を見たり、触れたりした感動はすぐに飽きてしまい、持続力にも欠けている。このような実態から一人ひとりの子どもたちが目を輝かせ、心躍らせ遊びの楽しさを全身で受け止め、夢中になって生き活きと遊び込める子どもを育てることが求められていると考える。

3. 主題設定の理由

一人ひとりの子どもは個性的で素晴らしい存在であると思う。その個性豊かな子どもの内面を揺さぶり、遊びに没頭できる時、子どもの本来の姿が見えると思う。時間、空間、物、人とのかわりを保障し自ら遊びの楽しさ、おもしろさや困難さに出会いながら遊びの醍醐味を心身で受け止めることができるならば主題に近づくと確信している。

子どもが夢中になって遊ぼうとする姿とは、様々な事象に触れ自らが考え、工夫しながら真剣に向き合い、一心不乱に立ち向かっている時の表情に子どもが夢中になって遊んでいると考える。そこで、科学する心育てと夢中になって遊ぶ姿を下記のように捉え実践を行う事とした。

科学する心を育てる・夢中になって遊ぶ姿とは・・・

科学する心を育てる

子どもが 出会う 事象	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが思いがけないことや、素朴な好奇心を感じる出会い（園内の自然、園外の自然） ・子どもたちが心を動かす出会い、心が揺さぶられる出会い（小動物、植物、気候、乗り物等） ・子どもたちがうれしい、楽しい、遊びたいと思える環境との出会い（物・人・時間・空間） ・子どもたちが素直な表現ができる出会い（絵を描く、歌を歌う、物を使って製作をする、友だちのつぶやき・会話等）
-------------------	--

興味・ 関心・ 意欲	<ul style="list-style-type: none"> ・「なぜ」「どうして」「不思議だ」「おもしろそうだ」と心が揺さぶられる。 ・「もっと知りたい」「どんな遊び方をしたらいいかな」「一人でやりたい」「友だちと一緒に遊びたい」と興味関心が強くなる。 ・「おもしろい」「もっと続けたい」「困ったな」「調べよう」と意欲が高まる。 ・友だちの模倣から自分の考えを生み出す。喜びがもてる。 ・遊びに必要なものを見つける、探して持ってくる、自分の考えを貫く等環境に働きかける。
------------------	---

挑戦・ 継続・ 満足感	<ul style="list-style-type: none"> ・「もっと続けたい」「もっと工夫したい」「もっと考えたい」と子ども自身が思いを大切に遊び続ける。 ・友だちと協調して遊ぶ。友だちと相談しあって遊ぶ。友だちと競争して遊ぶ。友だちの良さを認めるなどの姿。 ・地域の人材の活用（畑博士・川博士・地域の学校の先生・美術館・図書館・コミュニティの利用） ・「わかった!」「頑張った!」「出来た!」「調べてよかった、楽しかった!」 ・「こんな不思議を見つけた・・・」「やってみよう、面白そうだ。」更なる挑戦意欲
-------------------	--

夢中になって遊びを続ける子ども

—発見した！考えた！わかった！楽しい！の思いをもって遊べる保育—

4. 研究の目標

一人ひとりの子どもが出会う事象をきっかけとし、興味関心・意欲をもち自らの力で夢中になって遊びを楽しむための保育の在り方を究明していく。

5. 研究の内容と方法

- ①子どもの興味関心・意欲を日々の保育の中で見逃さず、保育者と子どもが共に遊びを育て夢中になって遊びを楽しむ工夫。
 - ・どのような事象に出会い興味関心をもっているか。
 - ・何に心が動いているか、何に感動しているか、どんな遊びに向かおうとしているか。
 - ・子どもの会話・物とのかかわり方・友だち関係等を受け止め日々の保育に生かす工夫。
- ②保育者の役割を明確にもち、子どもと共に遊びを創り出す工夫をする。
 - ・夢中になって遊び込む過程を明らかにし、その姿を支える保育者の援助の在り方を工夫する。

遊びの深まり・高まり

6. 実 践

1) 5歳児の実践 事例1 「発見した！考えた！工夫した！おもしろい木たち」

○4月6日（木） 天気 曇り 風強い

園舎の北側の桜の花がちらほらと咲き始めたことを見つけた子どもたち。早速お花見の話が始まった。

桜の木の下で、お弁当やごちそうを食べることだよ！A子

団子を食べるんだよ、したことないけど・・・K児


なんで梅の木や桃の木じゃない？ M子


木の下のするのがお花見だよ！A子

チューリップも咲いているけどお花見しないね

チューリップもお花見をするよ。今在家にあるよ・・・K児

<園の窓から見た桜>





五右衛門川の桜を手にとって香りを感じている子どもたち


園庭桜探検に出かけることにした。桜の花を間近でみて子どもたちは更に豊かな会話を始めた。

桜の花って鈴みたいだね・・・S子

咲いている花は白いのにつぼみはピンクだね・・・R児

桜の木の幹は光ってる！銀色だ！ Y児

<園庭の桜>



ほのかなピンク色だね・・・S子

何でお水あげてないのに花が咲くの？ S子

雨じゃない？ T児

ずっと降ってないよ。 S子

○4月7日（金） 天気 小雨から曇り 風強い

五右衛門川の桜探検に行く予定が、小雨のため行けない。しばらくすると小雨が止んできた。H児「今がチャンス！桜探検に行こう！！」と言ってきた。

桜が寂しそう・・・だって花が横や下を向いているよ・・・N児


小さい桜は花の匂いがしないね。 A児

12歳じゃないよ。Hちゃんのお父さんが切り株の線で何歳かわかるって話してたよ。あんまり多くて数えられなかったけど・・・A子

桜の年って切ってみないとわからないってこと？ M子

切られたら痛いよ・・・かわいそうでしょ・・・私は嫌！ H子


<五右衛門川の桜並木>



幹から芽が出て花が咲きそう・・・赤ちゃんの花だね S子

小さい桜は12歳！大きな桜は16歳かな？ K子

私は桜餅の匂いがしたよ・・・R子



・窓から見た桜、園庭に出てみた桜、園外で見る桜を感じる感性に違いが見える。「ほのかな色」という言葉を知っていて驚く。また、桜の木の年齢にまで話が及んだ。年長になって初めて出会う事象である。この出会った事象を大切にしたい。

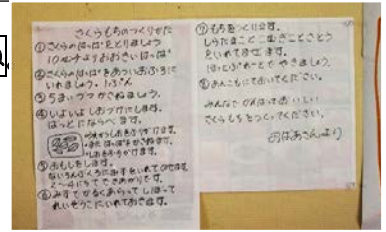
・一人ひとりのつぶやきをもっと引き出すために、桜の木に更に触れて遊びが広がるように支えたい。桜の花や木にこれまで深い興味関心をもったことはなかった。この興味関心がどのようにつながっていくか見極めたい。保育者もわくわくし子どもの語りにじっくりと耳を傾け、心からの共感を子どもに伝える。

・桜餅を作りたいとR子は言い続けている。その実現に向けて一緒に取り組みたいと考える。作り方がわからないと言うと

家からおばあさんに作り方を聞いておばあさんレシピをもってきた。やはり本気である。

○第一弾 4月11日(火) 桜餅を作ろう！まだまだ葉っぱ小さいね

・R子「先生昨日桜餅を食べたよ。その葉っぱ！」とうれしそうにみせてくれた。N児「僕も食べたことある・・・」私も、僕もとその経験を話す。T「Rちゃんが葉っぱをもってきてくれたね。こんな大きさの葉っぱがいるね・・・」R子「桜が散ったけん、葉っぱは大きくなってよ。」T「行って見ようか・・・」五右衛門川の桜の木の葉っぱはまだ5cm程度の大きさである。もってきた葉っぱと比べてがっかりする。R子「幼稚園の桜は？」急いで帰り葉っぱを探す。数枚同じ大きさを見つける。R児「あった！同じ大きさが・・・」H児「貸せて 葉っぱを比べるけん・・・」と5枚だけ桜餅の葉っぱが見つかる。R子「29人だが・・・5枚だと5人しか食べられんね・・・どうしよう・・・」T「ふくろう組さんで食べるのに枚数が足りないね。」S児「葉っぱも赤ちゃんだね・・・もっと大人になってからもらおう？」T「そうだ 5つ寝て待つことにする？」全員「それがいい・・・」5枚の葉っぱは大切に冷凍庫に入れて休ませる。



R子のおばあさんの桜餅レシピ



五右衛門川で桜餅の葉を探す



R子

園で桜餅用の桜の葉の大きさを見ながら探す

・5日後 4月17日(月)

R子「先生・・・今日は5つ寝てきたよ！」T「そうだね・・・さーどうなっているのかな・・・」R子「早く行こう！みんなが食べる桜餅を作らんと・・・」T「そうだね。みんな食べたいね・・・」少し大きくなっていて、ふくろう組が食べるだけの桜の葉が集まる。子どもたちは数え始める。「やっと桜餅ができるね・・・」R子「・・・でもこども園みんなに食べさせたい・・・先生みんなで何人いる？」T「赤ちゃんから数えると120人・・・」R子、K児、H児、A子「みんなに食べさせたい・・・」T児「もう一回5つ寝る？」全員の総意で5日間また待つことにする。



桜の葉の枚数が足りないことに心を痛める。やはり全員に食べさせたいようである。

○4月12日(水) 天気 安定した晴れ 気温低め

桜の花が散りはじめた。子どもたちは花を見に行きたいと訴える。花びらが散る桜の様子を見る子どもたちの目に飛び込んできたものは、桜の木にくっついている貝殻のような物(アオイラガ虫)を見つけ大騒ぎになる。

<イラガの集団>

これって何！不思議な物がくっついてるよ・・・K児

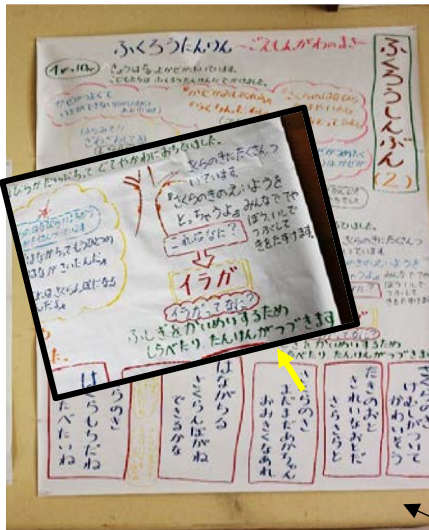
ここは海ではないが・・・川だけど・・・なんで貝殻？不思議・・・Y子

先生・・・早く帰って調べよう 早く帰ろうよ！・・・M子

今まで桜にあった？見たことないよ・・・H児

虫？貝殻？穴が開いてるけど・・・つるつるしてるよ・・・T子

捕ってみようか・・・硬くて手で捕れない！先生ちょっとやってみて・・・S児



・子どもたちのつぶやきや感動した様子等はすぐにふくろう新聞に書き込むようにしている。自分たちの発見は偉大なものとして受け止めているので大切に扱うようにしている。俳句も子どもが読んだものはすぐに書き留めている。(俳句らしきもの)毎年の年長さんが常に指を折って数えていたことを思い出し、自分たちも作ろうとしている。桜の花、木、虫すべてに思いがあるから心が動いていることがわかる。もっと子どもの内面に添いたいと強く願う。それが遊びに夢になる原点であると思う。興味関心意欲への出発である。

◀子どもたちが作った俳句▶

<不思議発見を解決しよう!> **イラガは桜の花が本当に大好きなのか？桜の木はどうなるの？**

・K児「先生 イラガはどの木にも付いているってこと？」 T「どう思う・・・」 T児「僕は違うと思う！」 T「どうしてそう思う？」 T児「桜の花がついてるからイラガもうれしくて寄ってきてると思うけど・・・」 T「Kちゃん、すごい発見だね・・・」 R子「それじゃ調べてみない、本当に桜が好きかどうか・・・」 H児「どうやって調べる？」 T子「行って見ればいいよ。もう1回 五右衛門川に・・・」 T「それはいい考えだね。」 K児やT児、T子の考えに賛同して行って見る。確かに桜のどの木にもイラガがびっしりとついている。しばし無言になる。 T「どう？桜の花が好きだってことわかった？・・・」 T子「みんな桜の花が好きなんだね。」 K児「ほかの木はどうなんだ？イラガは桜だけが好きだってこと？」 急いで園に帰り、園の木を調べてみることになった。 T「先生は今まで、知らなかったわ、イラガが桜の花が好きだってことを大発見だね・・・」と保育者自身驚きが隠せない。 Y児「こども園の木も調べよう！」 Y子「そうだイラガは木の栄養を取るから、木が枯れるよ・・・ねえ・・・」と賛同を求める。 R児「そう 枯れたら桜餅も食べれないから・・・」と、桜の木の気持ちになって子どもたちはイラガの不思議を次々と解明していく。その表情には自信がある。これこそ夢中になって謎解きをしている姿である。

<不思議発見を解決しよう 第2弾> **園の木にもイラガがいるかな？ 木を守ろう！**

・Y児「いた！ やっぱいた！ イラガが園にもいた！」 M子「この木にはいないよ・・・」 T子「その木の名前は？」 M子「わからない・・・」 園の桜の木にもイラガがくっついている。もみじの木にもたくさんくっついている。松の木、メタセコイヤ、プラタナスの木にはついていないことがわかる。 N子「わかった！ つるつるした木にはイラガがくっついている！ ガラガラした木にはくっついていない！！」 R児「花が咲く木や実がなるのはつくよきっと・・・」 みんなで「桜でしょ、ヤマモモでしょ、柿でしょ。」と大発見である。ふくろう新聞に書こうと意気込んでいる。一方、木が弱るからと竹の棒をもって落とし始める。友だちと協力して高いところのイラガを落とし始める。

F児「イラガは強い！ なかなか落ちない・・・首が痛くなる・・・」

T児「首が痛くても・・・木が枯れたらいけんよ・・・守らんと」

H児「そうだよ・・・木を守らんと、かわいそうだが・・・」 日々子どもたちの目が真剣に輝く、これこそ夢中になって活動している姿である。子どもの考える力に感心をするばかりである。



イラガがついているもみじの木

竹をもってきて、高いところのイラガを落とそうとする。



・ハترون紙を選び、ローラーで木を描きイラガを描きはじめる。

・イラガの抜け殻を必死で捕る姿に、子どもの豊かな発想を見ることができる。「もう イラガはこの殻の中にはいないよ。」とは言えない。子どもたちの折角の心をつぶすわけにはいかない。また、イラガがつく木もなぜかは解明できないが、子どもたちがたくさんの木に出会った感性なので、その感性を大切にしたいと思う。木の名前も調べて少しずつ名札を貼り付けている。名前を知っている木にいち早く取り掛かっている。子どもたちが、木を日々の生活に取り入れる姿は過去にもないことで保育者も必死で図鑑を見て、自分自身の知識を高めたいと思い、子どもたちに負けないようにしている。



「もみじ」と書いて糸鋸で切り始める。みんなに木の名前を知らせよう。



木にガムテープで貼ることができない事が解りキリを使って穴を開けることにした。



友だちの手助けを受けて、もみじの名前の看板を取り付ける。

○第2弾 5月2日(火) **桜餅を作ろう！ みんなの葉っぱが集まった。**

・連休前 R 子と Y 子がおばあちゃんレシピを見て「先生、桜の葉っぱが集まったから塩漬けにせんといけんよ。」 T 「よく覚えていたね・・・おばあちゃんレシピを見て桜の葉っぱを漬けることにするか」



レシピ通りに熱いお風呂に入れます。



お風呂から上がって、冷まします。5枚ずつ束ねます。



塩を振って重ねます。最後は塩で終わりにします。ナイロン袋に水を入れて重石をします。

・「先生・・・いい匂い・・・桜餅の匂い！」子どもたちも感動している。保育者も初めての体験である。桜餅のいい匂いが部屋に充満している。T 「これでまた、お休みをさせないと・・・連休明けに桜餅を作ろうね!」「はいー 待ってます！」何時もより元気のいい返事である。給食室の先生に

お願いをする。「あんこを煮てください。お願いします。」全員口を揃えて伝える。

第3弾 5月8日(月) **美味しい桜餅を作るぞ作戦!**

・連休明けにも関わらず生き生きと登園してきた。桜餅を作るというめあてがあるからだと思う。エプロン・三角巾で身支度をしている。レシピには小麦粉と砂糖と食紅を混ぜて焼くと書いてある。S子「先生そのピンク薄いよ・・・もう少し入れて。」R子「いいよ・・・その色。」



安全のため、手を添えてもらって焼きます。「ふ〜」ため息がでます。「緊張する〜」



ぺちゃんこダメだよ。ふっくらとせんと。買ったみたいに・・・



給食の先生お願いします。



全員のクラスに配っていきます。「どうぞ食べてください。美味しいです」誇らしい表情で配る子どもたち。

おいしい桜餅が全員分完成! 作戦大成功!

大満足・・・一人ひとりの表情が素晴らしく輝いている。

○5月11日(木) 天気 晴れ 微風 **ソラマメの葉っぱの不思議**

・Y児「先生・・・ソラマメが下向いたよ!採れるよ!」と大声で走ってきた。T「空を向いているときはまだ採れなかったね・・・」Y児「違うよ・・・下向いたよ・・・」T「行ってみようか」園舎の中に簡単な畑を作っている。そこにソラマメがたわわになっている。空を向いている豆、横を向いている豆、下を向いている豆ができています。R子「みんな!下を向いている豆だけ採るんだよ・・・上や横は採ったらいけんよ!」と強く言う。まるで先生のような発言である。みんな「わかってるよ」と反撃をする。行くと見ると確かに、下を向いているソラマメがたくさん出来ている。



T子「頭が重たくなって・・・早く採って叫んでいるね うふふ」M子「そうだね、きっと重たくて大変だね・・・さー採ってあげますよ・・・」S児「おもしろいね。僕たちやさしいってことだね・・・軽くしてあげてるから・・・」

H児「先生・・・この豆の葉っぱ・・・ぬるぬるしてるよ・・・」と言う。T「ん・・・ぬるぬるしてる?」S児「本当だ!ぬるぬるしてる・・・なぜ?」T「アッ 本当ぬるぬるしてるね・・・」少し分厚い感じから、ぬるぬると表現したのではないかと思う。N児「桜の葉っぱと比べてみたい」と言い出す。すぐに桜の木に向かう。桜の葉と比べる。M子「サラサラとぬるぬるだ!」Y子「豆の葉っぱがぷかぷか・・・桜の葉っぱはサラサラ・・・葉っぱってみんな違っておもしろい!」A子「桜は筋がっぱいあるよ。」R子「みんな違う葉っぱだよ・・・葉っぱって面白いね」

子どもたちは園庭の様々な葉っぱを集め出す。

K児「ギャー 大変こんなところにイラガがいる!」と大声を出す。「セメントの隙間にいっぱいいるよ!」また大発見である。Y児「木だけじゃない?ご飯は



どうしてるかな・・・だって木だったら食べ物があるでしょ・・・」A児「そうだね。何を食べたと思う？セメントを食べる？」イラガの殻だけであることを告げたいが、やはり告げられない。子どもたちの発見をつぶしていくことはまだ出来ない。

・桜餅作りから振り返ると、桜の葉の大きさを比べて、大きくなる期間を待つという根気のいる活動に取り組んだ。5日待つ、さらに5日待つという行動、冷凍庫で寝かせながら、枚数を全員分揃うまでの意欲これこそ、夢中になっている姿である。また、一人の活動ではなく、全員の力でないと120枚の桜の葉は集まらなかった連帯感が子どもの意欲や挑戦、継続力につながっていると考えられる。

・イラガの殻がセメントの隙間にもあったことが更に驚きにつながった。虫はすでに出ているとは言えない。子どもたちの意欲や継続力を大切に見守りたいと思う。

○5月12日（金） **自分の葉っぱ新聞が作りたい！**

・K児が紙を取り出し、自分で集めた葉っぱを貼り始めている。おもしろそうである。一人ひとり自分の新聞を作ると言い出した。M子「私が見つけたことを書くよ！」M児「僕も見つけたこと書くよ。」



<A子の新聞> プラタナス・ソラマメ・桜の葉・どんぐりの葉・クローバー

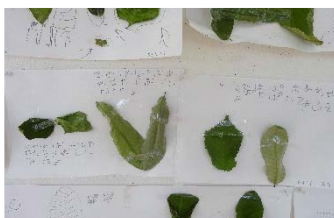
・「表と裏の違いを教えるよ」と5種類の葉っぱを表裏に張り、色の違い、触り心地の違いを確かめてうれしそうである。「葉っぱはどれも一緒だね・・・」とつぶやく。満足感いっぱいである。



<Y児の新聞> 桜の葉・ソラマメの葉・サルトリイバラの葉
・ソラマメの葉を置き、6個の区切りの物差しらしきものを作る。「6mだ」と言う。次に桜の葉を物差しに置く。「5mだ！」と言う。サルトリイバラの葉を置き「4mだ！」とうれしそうに話す。表彰台を書いて順番に置く。



<N児の新聞> 桜の葉・ソラマメの葉・どんぐりの葉
・葉っぱを見ながら描いている。「僕は葉っぱのクイズ新聞」と言う。自分が描いた葉っぱと本物の葉っぱをつなげるクイズを作る。壁に貼る時「僕のは一番下に貼って・・・みんながクイズをするから」と話す。紙は2枚つなげている。



<M子の新聞> 桜の葉・どんぐりの葉
・「桜の葉っぱをあわせたらリボンになったよ。」「どんぐりの葉っぱを合わせたらVになったよ。」「桜の葉っぱとどんぐりの葉っぱを合わせて振ったらパタパタと聞こえたよ。」ととてもうれしそうにつぶやいている。「かわいい新聞」にするわ。」



<O子の新聞> 桜の葉・どんぐりの葉・ソラマメの葉を多数
・葉っぱを魚に見立てて、海の中を表現した。「海の中を楽しく泳いでいるよ～」次の日家でヨモギの葉っぱでこいのぼりを作って自分で張っていた。「海の子新聞にする」と言う。

・子ども自身が活動の提案をし、そのねらいに向かって活動をしたから意欲的に、最後までやり遂げることに繋がったと思う。

・桜の葉、ソラマメの葉、どんぐりの葉等葉っぱの違い、手触り、大きさ、色の違い、音等、当たり前と思われることに子どもたちは感動し、不思議に思い、それらを遊びに生かしていく力を発揮した。これこそ、科学する心育ちであると思う。今まで新聞は先生が書く物と思っていたと思う。自分で作りたいという願いを実現した。書いている文字は、鏡文字であったり、文字が抜けていることもあるが、子どもたち自身がやり遂げたという満足感が子どもを大きく成長させると考える。

<葉っぱ新聞の出来上がり！>

S児君の葉っぱのHを作るところが面白かった。葉っぱで英語ができるなんて知らなかった。

Y児君の葉っぱはみんな違うのを見つけたね。えらいな～

Nちゃんのゲームおもしろいけど難しい・・・Nちゃんすごい！

T児「みんな葉っぱが違うね・・・木も違うね・・・プラタナスの木が一番大きいね・・・葉っぱはまだ赤ちゃんだけど！」

先生・・・しわしわしてきたけど・・・元気がないね。もっとしわしわになるかな？

K君の葉っぱが増えてるよ。庭で見つけたって・・・僕も見つけたよ！もみじでしょ・・・これは・・・？

いちごのへたを貼ってる？Yちゃんよく考えたね、びっくり！

○5月22日(月) 押し葉にする！・転がすコース作り・家作り

・R子は毎日葉っぱのしわしわを気にかけていた。R子「しわしわにならないといいけど・・・先生どうする？」と聞く。T「しわしわではダメなの？」R子「先生・・・しわしわは枯れていくだけだよそれでもいいの？」T「[そうだね・・・しわしわにならない方法があるけど一緒にやってみる？]」R子「やってみる・・・やってみたい・・・教えて!!」と言う。保育者が唯一押し葉の方法を教えることにした。葉っぱが枯れていくことを気にかけていたこと、葉を愛おしんでいることから、教えることで子どもの意欲や継続力が高まると判断した。



M子「どんな大きさ？」T「葉っぱが入るくらいの大きさがいいと思うよ・・・」M子「わかった！」T「何枚いるのでしょうか・・・」M子「は～い 2枚です！」N子「私は4枚！」T「えっ！」N子「だって・・・葉っぱが多いから・・・」T「そうか・・・考えたね」と自分で葉っぱが入る大きさに切ってティッシュで葉をくるんで輪ゴムで止めて、重しをする。という作業を繰り返し行っている。S子「私は5日してから開けてみるわ」と言う。桜餅の葉を取りに行った時の経験が生きている。一方、木の廃材を使って転がすコース作りも始まってきた。幼稚園にある木の素材を出して始めた。



・N児「ねえ～何作る？」A児「転がすコース・・・」N児「なんで転がすコースを作る？」A児「だっておもしろいでしょ！木だし」
N児「僕も考えようかな・・・」A児「まず 自分で考えた方がいいよ・・・僕みたいに～」自分で思うように考えて作りたいときは、友だちを入れない。この地道な遊びこそ考えて、繰り返し挑戦できる遊びである。友だちが必要になるまではじっくりと遊ばせたい。



・5日待ってできた押し葉をラミネートで加工した。かわいいコースターの完成である。M子「先生 ほら どう？」T「あら 素敵なコースターができましたね。気分はどう？」M子「最高！」大満足である。友だち分を作ると言って毎日挑戦する。



・子どもたちは自分で遊びを選択し始めた。コースター作り、木の家作り、転がすコース作り等である。様々な事象との出会いがあったからこそその中から自分でやってみたいと思える興味関心を持ち、意欲的に遊びを展開していくようになってきたと思う。夢中になって取り組んでいる。考えたり、工夫したり、試すことができる遊びを子どもたちは自ら見つけ出している。

○考 察 **事例1** 「発見した！考えた！工夫した！おもしろい木たち」の考察

①意識のつながりから遊びのめあての明確化へ

・5歳児の子どもたちは、遊びのめあてが明確にもてることで生き生きと活動することにつながっている。遊びのめあてがはっきりともてない4月当初、桜の花びらを介して会話をしたことから子どもたちの意識のつながりが始まった。まだ遊びのめあてはもてていないが、子ども同士の会話から、また年長になったという自覚が重なって遊びへの意欲に変化が見えるようになってきた。この時期こそ子どもが遊びに向かうための保育者の支援が必要であり、その後の遊びの発展につながっていくものとする。子どもたちの思いを大切に、寄り添っていくことが大切だと考える。

②意欲、継続する力、夢中になって遊ぶ姿＝科学する心育てへ

・桜の葉の成長、桜餅の体験、桜の木に付くイラガ虫、更に葉っぱ新聞づくりへと発展していくが、その一つ一つが子どもの遊びのめあてになっていて子どもたちが出会う様々な事象から、意欲へそして継続する力へと変化を遂げ、子どもたちの自信として積み重ね、夢中になって遊ぶ姿に成長しているとする。その間、子どもたちが出会う事象に真摯に向き合い、考え、工夫を重ねながら楽しさや発展するおもしろさ、自分でできたという満足感まで感じていると思う。すなわち、夢中になって遊ぶ姿＝科学する心育ちにつながっていると言える。遊びのめあてがもてること、5歳児の子どもたちの夢中になって遊ぶことにつながっているとする。

③遊び込む姿へ

・自分の遊びに自信をもってくると、さらに遊びのめあてをみつけ、それに向かって歩もうとする。押し葉でコースター作り、木の素材を集め転がすコース作り、同じく木を使って家づくり等自ら積極的に次の活動を生み出していった。木のコースは箱や桶と違い、木の形・木の長さ・合わせ方、大きさ等苦戦をすることが多いが、それでもあきらめずに取り組んでいく姿がある。木で家を建てたいと考えたM児は、夢中になって継続している。貴重な日々の体験が、生きる力の基礎を育てること＝科学する心を育てることにつながってきていると考える。

(中 略)

3) 3歳児の実践

事例3 「見た 触れた 砂と水はおもしろい！」

○5月31日(水) 天気 曇り

・大好きな砂場で遊び始めた子どもたち。園にも慣れ落ち着いて遊びができるようになってきた。子どもたちの心が安定する環境の砂場で遊びだした。全く雨が降らない状況に、砂も乾き、さらさらとした感触である。

T児 「先生・・・水出して！サラサラだから・・・」

N子 「この砂にかけてよ！サラサラのところに・・・」

T 「タライに水をためておくよ・・・」

T 「そうだね・・・サラサラだから・・・」



H児 「も～ すぐ倒れる・・・なんで・・・」



H児 「よーい スタート・・・あつまた倒れた」



U子 「このお花ください・・・」

U子 「先生・・・誕生日おめでとう・・・」



K子 「桃太郎さんのキビ団子作るよ 硬い団子だよ」



M子 「今日は誕生日パーティーするよ！」

・今年は雨が少なく、園庭の砂は風が強い日は舞い上がっている状況である。雨がなくて乾燥している砂場で、水を出し、砂場を潤しながら子どもたちは遊び始めた。誕生日ケーキを作っているU子は砂が乾いている方を好んでいる。H児は水を流しポットに溜め込みたいが、すぐに砂が崩れるので濡れた砂が欲しいと感じている。子どもの遊びには砂の様子一つで遊び方が変わってくる。

・砂場の砂が風でみんな飛んでいく様子から、砂場の砂の補充をためらっていた。



・砂が水で湿ってきた。子どもたちはすぐに山を作ろうと寄ってき始めた。それぞれがシャベルをもって砂を高く積み上げ始めた。保育者も子どもと一緒に砂山を作り始めた。砂の量が少ないうえに、なかなか高く積み上げることができない。それでも歓声をあげて楽しんでいる。



・一緒に砂を集めている。めあてがもてていることである。
・上れない友だちの手を引いてあげることができている。



T児「わ～崩れる～助けて～」

N子「やおい（やわらかい）
けんだわ～かたくせんと・・・」



M児「叩いて 叩いて」
「砂も持ってきてよ・・・
みんなでせんと・・・」

T児「先生も手伝って
よ・・・ちょっとだけ」



固くなった砂山を試してみる。



プラタナスに届くかどうかを挑戦
何回も繰り返す。



シャベルでプラタナ
スに向かって挑戦する。



ブルドーザーになって砂集めをする。
もっと高くしたい。もっと砂を集めたい



パイプで成功！プラタナスに届いた！

・水が加わることで、砂が固まりやすくなってきたこと、砂を乗せただけでは、上れない事を体感している。大きな山に上りたいというねらいが明確化していることがわかる。

・砂を叩いて固くすることは経験済みであるが改めて固める意味をしっかりと見出している。これこそ興味関心意欲が高まっていると言える。

・砂と水の遊びは、子どもたちにとって最高の環境である。砂に触れているだけで、気持ちが安定し、黙々とかわり続ける魅力的な素材である。そこで、高い山を作るといった発想はこの日の、天候や砂の質を自然に体に感じ取っていった遊びになったように思う。高くしただけではやわらかくて上った感じがしないこと、固くすると上れるという考えを周りの友だちと共有しながら無心に遊ぶことができたと思う。固くなった山を上ってみた子どもは、プラタナスの葉が急に近くに見えたと思う。プラタナスは高い場所にあるので、普段は気にも留めていなかったと思う。山に上り急に近くなった感じを受けて、葉っぱに触りたいという次のめあてをもつことができたと思う。一生懸命葉っぱに触ろうと山の上でシャベルで触ろうとする。しかし、なかなか触れたという感触がないので何度も挑戦する。山を固くして上ってはシャベルで触ることを繰り返し、シャベルでは届かない事を知ると、次はパイプを持ち出してついに触ることができた。

○6月6日(火) 天気 晴れから曇り

・まだ雨は降らないが、毎日砂と水で遊ぶために砂場は水ですっかり潤っている。生き生きと遊び始める。山作りをしてみんなで一緒に上った経験を学習した子どもたちは、傾斜を使って水を流したり、溜めたり、砂の沈み方を楽しんで繰り返しそれぞれの子どもたちが遊び始めた。



・K子が山の上から樋を置きだした。傾斜を使って水を流し始めた。「流れる・・流れる・・」と独り言をつぶやきながら遊び始めた。「ふ～」と水汲みも一生懸命である。
・その遊びを見ていたS子・H児も同じように樋を置き始めた。放射状にならべ、自分の水を流すというおもしろい場を作り始め遊びだした。3歳児の子どもたちの発想は瞬間にひらめき、すぐに遊びにつなげる豊かさこそ科学する育ちであると思う。

・しばらく歓声をあげて繰り返し遊びを続けていたが、樋とパイプを使って長い川と称して遊び始めた。樋の上にパイプを置くが、水が樋の中に流れず苦戦をした。バケツを樋とパイプの繋ぎの下に置いてみる。水は樋の中には少ししか入らない、樋とパイプを密着させたいと砂で固定し始めた。



・会話がない。黙々と試している。困った表情も見せない。真剣そのものである。この時間は保育者が声をかけるころではないと考え、見守ることにした。樋に水を流すことは簡単だが、つなげるという行動を起こした時自らどのような解決策を見いだすのか楽しみに見守る。



・M児「先生見て！見て！ほら！」樋とパイプの置き場を逆にした。水がスムーズに勢よく流れている。T「ホ～ 考えたね・・びっくり！」M児「だって・・水が流りたいが・・」T「そうだね・・いい考えでびっくりだわ」T児「僕も考えたよ 一緒に・・」T「そうね、みんなで力を合わせるといい考えが出るね・・本当にうれしいな！」心から子どもの会話を喜ぶことができた。

・その流れる水を受け止めているT児・H児たちは樋の先に山を作り水の勢いで山が崩れることを楽しんでいる。T児「速く水を流して！」H児「山が崩れるよ～」K児「砂をもっと高くして！」ここでは会話も盛んになっている。



・S子「五右衛門側に行きたいね～」T「五右衛門川知ってるの？」S子「知ってるよ・・川行ったもん・・」T「行ってみる？」

・6月7日(水)大雨になる。

子どもたちの遊びの様子から、砂を入れることを決める。しかし、大雨になり心配するが、子どもたちはダンプカーから落ちてくる砂に歓声をあげる。H児「すごい！力持ち！」と喜び手を叩く。T児「ね～砂はどこからもってきたかな？山かな？海かな？」K子「わ～大きな山になった！上がりたい！」と口々に話す。砂で思いきり遊びを続けていたから、そのダイナミックな砂やダンプカーに触れたことは大きな経験である。

○6月8日(木)晴れ



・桶やスコップ、シャベルを使って砂遊びを楽しんでいた子どもたちは、ダンプカーで砂が運ばれたことで、手で砂の感触を楽しみだした。砂の濡れ加減、自らの手が砂を自由にできる事等、水を流すことの工夫から、自らの身体を使って砂と遊ぶ楽しさに変化させていった。K子「先生 高速道路・・・」S子「怪獣の口！」などイメージして遊ぶ姿が伺えた。一方ひたすら、自らの手で山をたくさん作って「みなみ山だ！」と毎日見ている山を作る友だち、自分の手を隠して「さ～どこにいったでしょうか～」大笑いするなど、自らの身体を思い切り使って遊び、その心地よさを楽しむようになった。砂と水の遊びで様々な道具を使って遊ぶことを考えていた教師は、砂その物のおもしろさ、自由にできる砂の感触を忘れていたように思い反省した。叩くと固くなる、どんどん掘り進めると大きな穴になるという活動は当然だが子ども自身が思い切り身体を動かしてこそ感じるものであると思う。H児は少し離れた場所でひたすら乾いた砂の感触を楽しんでいた。サラサラの感触、積んでも積みきれない砂の感触、顔を近づけ砂に話しかけている姿、手指からサラサラと落ちていく砂を見ながらニコリとほほ笑むH児から、砂の感触そのものの遊びの大切さを教師自身が学ぶことになった。



○考察 **事例3**「見た 触れた 砂と水はおもしろい」の考察

①遊びの実態

・子どもたちの遊びは決して無駄と思えることはなく、その遊びの内容、子どもの考え、意欲を保育者が良く理解しているかが次の遊びや意欲につながっていくと考える。

②心の揺さぶりから遊び込んでいく過程

・子どもたちの心の感性が揺さぶられ、それぞれの思いが瞬時に動き、即行動に移せることこそ、遊び込んでいく過程であり科学する心育ちにつながることだと言える。

・遊びに熱中している時の集中力、自らの思いが果たせ、自らのねらいが達成したとき豊かな笑顔が見られる。シャベルからパイプの棒に持ち替えてプラタナスの葉に触れた経験、桶を使って水を流すという工夫、新しい砂の出会いから身体を使って思い切り遊ぶ姿から言える事である。

③興味関心から満足いくまで遊ぶ姿＝科学する心育ちへ

・子どもたちが出会った事象に、興味関心をもち、意欲的に活動を生み出す経験をたくさん積むことが科学する心育ちにつながっていることがわかる。無理に挑戦・継続に向かわなくても、その瞬間 瞬間を満足いくまで遊ぶことが、沢山の経験として3歳児の子どもたちには必要であると考える。その中で挑戦や継続に自然につながって遊びの深まりが見られていくと考察する。このことが科学する心育ちにつながると考えている。

7. 全体考察

1) 「科学する心を育てる」ために

・「科学する心を育てる」という主題に向かった時、「子どもが会える事象」を見逃さないようにしたいと考えた。園内の自然であったり小動物であったり、子どもたちの心を揺り動かす大切な事象こそ子どもたちの本物の遊びにつながると考えた。子どもたちがどんな事象に出会い心を動かされたかは遊びの出発地点としては見逃してはならない事である。桜の花を様々な角度から眺めた5歳児、天候不順が招いたからこそ出会えた4歳児の「アリ」とのつながり、砂遊びの原点を考えさせられた3歳児の砂の遊びから主題を捉えることができた。

・日々子どもたちの遊びは一樣ではなく変化していくものである。その変化していく過程こそ「科学する心育ち」があると考える。子どもたちに全てを任せてしまうことで安心すれば、子どもたちの大切な遊びは自然に消滅していくと考える。そこには、教師の指導性が必要になってくると思う。子どもたちの発達を熟知し、今育てたいこと、今だから育つ力を保育の構想に位置付けて、子どもと共に保育を楽しむことこそ主題につながると思う。

・「見て」「触れて」「発見して」「わかった」と子どもたちの心が豊かに動くときその遊びに「科学する心育ち」があると確信する。

2) 「夢中になって遊びを続ける」ことについて

・「科学する心を育てる」ことと、「夢中になって遊ぶ」ことを車の両輪と考えたい。この二つのかかわりこそ遊びの根幹にかかわることになると思う。5歳児の実践では、自分たちがやりたいと思ったり考えたことに対して何としてもやり通すという力を見ることができた。その力こそ車の両輪であると考え。4歳児も3歳児も同じことが言える。考えたり、工夫したり、調べたり。不思議に思ったりすることの中にこそ科学する心育ちであり、夢中になって遊びを楽しむ姿である。



大きな材木屋さんで原木から製材までの過程を感動体験する。



自分の作ったコースを友だちとつなげて
全員の力を集めたコースが完成した。

・保育者が遊びの価値を見いだして子どもと共に活動することは言うまでもない。5歳児が「桜餅を作りたい」と話を盛り上げた時、「無理だから・・・」と思うか、おばあちゃんレシピを生かしつつこども園全員の桜餅を作る方向で子どもと一緒にやり遂げる努力をしていたかで、教師の指導性が問われると思う。子どもの生き生きした姿を支えるか、子どもと共に諦めるかでその育ちが大きく変化することになる。桜の葉が大きくなるまで根気よく待つことができたのはなぜか、冷凍庫で桜の葉が腐らないように寝かせることに納得をしたのはなぜか、レシピを見ながら桜の葉の準備を楽しんでいたのはなぜか、桜餅を包む皮の色はほのかなピンク色をしてることにこだわったのはなぜかを考えた時、子どもの深い思いや考えの価値を見だし、子どもと共に遊びを楽しみたいとする指導性にかかっていると思う。決められたことを決められたようにすることで安心するのではなく、子どもたちの豊かな遊びの実現に向かって共に歩むからこそ、夢中になって取り組み、子どもの姿がそこにあると考える。4歳児、3歳児も同じ考えである。車の両輪と捉えたこの主題を今後も大切に育てたいと考えている。

8. 課題

教師の指導性は子どもの遊びを助けたり、時には先頭に立つこともある。また、子どもの意のままに任せることもある。このように教師の指導性には正しい答えはないが、車の両輪が生き生きと働くために再度教師の指導性に視点を当てたいと考えている。

①教材研究

②出会わせ方の構想

③科学する心を育てる・・・子どもの内面の動きに共感し寄り添う教師の指導性

9. 研究同人

長島 一枝・小村 祐子・安田みなみ・楨原 由佳・森川 奏子・佐藤 友美・杠 真由子



築山をアリの巣にして大満足！